

# 「東北の復興」と「ワールドクラスへの飛躍」を目指して、東北大学は強くなります。応援してください。

東北大学 総長

さとみ すずむ  
**里見 進**氏

## プロフィール

昭和23年6月18日生まれ。沖縄県那覇市出身。青春時代を米国統治下の沖縄で過ごし、東北大学医学部には国費留学生として入学。大学を卒業後、同医学部講師を経て平成7年教授に。同大学の臓器移植医療部長、16年に東北大学病院長、翌17年に副学長を併任。今年の4月より現職。専門は臓器移植、肝臓外科。



## 震災からの復興を先導する 新しい研究所を創設

—まず総長が推進しようとお考えになつていらっしゃることをお話しただけですか。

東北大学は百年以上の歴史のある大学として、「研究第一主義」、「門戸開放」、「実学尊重」という3つの理念を掲げ、これまで活動してきました。この精神を基盤として、東北地方の震災復興に大学の力を発揮すると同時に、産業収益力の低下など、震災前からこの国が抱えている課題解決の一助となるべく、国自体を立て直すために大学ができることを考えるのが大きなテーマであると思っています。

また本学は地域に根ざした大学であると同時に、研究面では世界を牽引するトップレベルの研究拠点として、その成果を世界に発信していく使命があります。それを実現すべく、「ワールドクラスへの飛躍」をキーワードに、学術基盤を豊かなものとし、教育研究レベルの一層の向上を図ってまいります。

—東北の復興に、どのような形で貢献していくこととお考えですか。

被災地にある総合大学として、震災からの復興・地域再生を先導する研究・教育・社会貢献などに戦略的に取り組む、その成果を実践する「**東北大学災害復興新生研究機構**」を創設しました。

その中で災害科学国際研究所の設置、東北メディカルメガバンク計画の実施など、8つの大型プロジェクトのほか、180を超える多様なプロジェクトを構築しました。

その中からいくつか内容をご紹介しますと、まずこの4月1日に災害科学国際研究所がスタートしました。本学にとっては、およそ70年ぶりとなる本格的な研究所の新設で、恐らく国際協力も行う災害科学の研究拠点としては、日本で最も規模の大きい研究所になる予定です。地震をはじめ、災害全般を科学的に研究すると同時に、人文系の先生にも入っていただき、社会の組織の問題や心のありよう、医療の問題などにも取り組む研究所になると思えます。ここで研究を重ねることによって、災害科学の新しい対処方法などが出てくるようになれば、それを基にした産業が生まれる可能性があります。

また、2つ目の大きなプロジェクトとして、東北メディカルメガバンクというものをつくることになりました。医学系研究科の中に施設を建設する予定で、遺伝子情報と医療情報を集積する組織になります。

この遺伝子情報の集め方というのが非常に特徴的で、ここでは「垂直の遺伝子情報」を集めようとしています。東北地方は三世代同居家族が比較的多い地域ですから、親・子・孫と遺伝子背景が似ている人たちの遺伝子情報を集積します。そうすると糖尿病のように家族・家系的に発生する可能性が高



平成24年4月4日に行なわれた  
東北大学災害科学国際研究所看板上掲式の様子  
(写真左：里見総長)

い病気などについて、その原因の遺伝子を調べるのに有効なものではないかという発想です。新しい遺伝子検査の方法によって、病気の原因・治療法が見つかるとも可能性があります。東北地方の医療に近代的な医療を持ち込むことで、創薬の研究が進んだり、新しい事業が生まれたり、もしくは医療機器の開発につながれば、これも産業化ができるのではないかと考えています。また、情報ネットワークをはりめぐらせることで、医師や医療スタッフが少ない東北地方でも、近代的医療を可能にするといった展開も目指しています。

他にもたくさんの方が準備されていて、それぞれがうまく成果を上げることができれば、地域の産業を創出できるでしょうし、雇用にもつながるだろうと思います。大学ができることは「新しい知」を創造し、それを基に都市産業を興すことです。そのためにも本学の強みはより強くして、弱いところ

ろはできるだけ強くしていこうと意気込んでいます。

### 研究成果実用化のための サポート体制を強化

強化したいのは、どの部分ですか。

私は東北大病院の病院長をしておりましたが、生命科学の分野では病院を中心にトランスレーショナルリサーチ（橋渡し研究）に力を入れました。研究を研究で終わらせるのではなく、創薬や病気の治療に結びつけ、企業とタイアップするなどして実用化するということです。学者には研究成果を知財として保護しようといったことに無頓着な人が多く、学会で発表した研究成果が諸外国で製品になり、日本がそれを買わなければならないという事態が起きています。生命科学系では、知財を守る特許の専門家や、製品にするまでに必要な手順を整理してアドバイスしてくれるプロが、研究者をサポートする体制を構築することができましたので、今後は別の分野でも実現していかなければならないと思っています。

### 地域の大学を育てるのは 企業と市民の応援

先生方だけでなく、学生が産学連携に参加する可能性はあるのでしょうか。

私は、大学院生を一人の研究者として処遇すべきだと思っています。ですから当然、産学連携にも参加するでしょう。少し話は逸れますが、実は、私は企業に大学院生のスポンサーになっていただけないかと、常々思っているのです。例えば学生が企業の方々に前にして研究内容を発表し、「それはいい研究だ」と思った企業に応援をしていただくわけです。地元企業に「私たちの大学の学生を育てた」と言っていたら私もうれしいですし、学生も研究により力が入ると思います。

もともと、大学とは市民が知識を求めて集まってくることで成り立ってきたわけです。そこで、もう一度「市民に開かれた大学」というものを見直し、市民の皆さんに聴講生になっていただき、大学の文化を伝える役目を担っていただきたいとも思っています。実は、市民の方々にも本学のサポーターになっていただけたらと考えているのです。「地域全体が大学を育てる」となれば、大学自体が面白いものになりますし、仙台市、宮城県、東北自体もきっと楽しくなるはずです。皆様には地元のプロスポーツチームを応援するように、ぜひ東北大学の応援団になっていただきたい。本学も強くなります。これからも末永く応援してください。よろしく願います。

## 生命の母、たったひとつの『海』。

地球上のありとあらゆる生命の源、『海』。この、『母なる海』を、美しいままで未来へと残していかなくてはなりません。21世紀の子供たちも、今と同じようにこうして海で夏を過ごせるように。そう私たちは考えています。私たちは青葉環境保全です。

——より良い環境をめざす——  
**AOBA 青葉環境保全**

本社／仙台市若林区蒲町19-1

電話(022)286-3161(代)

# 海